

さらにこの句は、つぎの賦の内容を踏まえる。

『文選』登樓賦一首

原文

登茲樓以四望兮、聊暇日以鎮憂。覽斯宇之所處兮、實顛歛而寡仇。挾清漳之通浦兮、倚曲沮之長洲。背墳衍之廣陸兮、臨臯隰之沃流。北彌陶牧、西接昭丘。華實蔽野、黍稷盈疇。雖信美而非吾土兮、曾何足以少留。遭紛濁而遷逝兮、漫踰紀以迄今。情眷眷而懷歸兮、孰憂思之可任。憑軒檻以遙望兮、向北風而開襟。平原遠而極目兮、蔽荆山之高岑。路逶迤而脩廻兮、川既漾而濟深。悲旧鄉之壅隔兮、涕橫墜而弗禁。昔尼父之在陳兮、有歸歎之嘆音、鍾儀幽而楚奏兮、莊舄顯而越吟。人情同於懷土兮、豈窮達而異心。惟日月之逾邁兮、俟河清其未極、冀王道之一平兮、假高衢而騁力。懼匏瓜之徒懸兮、畏井渫之莫食。步棲遲以徙倚兮、白日忽其將匿。風蕭瑟而竝與兮、天慘慘而無色。獸狂顧以求羣兮、鳥相鳴而舉翼。原野闐其無人兮、征夫行而未息。心悽愴以感發兮、意怛怛而潛側。循階除而下降兮、氣交憤於胸臆。夜參半而不寐兮、悵盤桓以反側。

口語訳

この高殿に上って四方を見渡し、しばらく暇を得て憂いを晴らそうとする。この建物の位置するところを見るに、誠に明るく広々として並ぶものがない。清らかな漳水のまっすぐな水辺をさしはさみ、まがった沮水の長い中州のそばにある。みぎわや低地を走る広い道を背にし、水沢に注ぐ流れを前にする。北に陶朱公の墓のある郊外を見晴らし、西は楚の昭王の丘陵に接する。華や実が野を覆い、穀物は畑に満ちている。誠に美しい土地であるが、わが故郷ではない。どうしてしばらくであつても留まるに足ろうか。世の紛乱に遭い、あちこちに移り行き、いたずらに十二年を越えて今に至つた。心はいつまでも故郷を恋慕う。